

## 玉碗の隠逸と墨蘭

星山晋也

### 1

玉碗梵芳は室町時代の初期に於いて墨蘭を描いた五山の高僧として知られている。しかしこの時代に禅林の中で墨蘭を描くことが流行していたわけではなかった。それにもかかわらず玉碗はおそらく半世紀以上にわたって蘭を描き続けていたようなのである。南北朝期には鉄舟徳斎が墨蘭で知られるが、玉碗以後の五山に於いて墨蘭を描いて名を残した禅僧は殆ど知られていない。そこでこの小論は、玉碗がなぜひとりこの時期にあって蘭を描き続けたのかについて玉碗の隠逸志向を手がかりにして推察を試みたものである。

### 2

室町初期の三十三年間におよぶ応永年間（一三九四～一四二七）に日本の禅林において、詩画軸の大流行があった。詩画軸とは同一

玉碗の隠逸と墨蘭

の画面上に詩と画がかかっている掛軸のことではあるが、題詩の数がきわめて多い詩画軸の流行が五山禅林で南北朝末に始まり、応永年間に京都五山とくに南禅寺を拠点として最高頂に達した。その風潮は次の永享、嘉吉、文安の十八年間（一四二九～一四四八）に受け継がれて、詩を寄せる僧の数を減じながらも、応仁の乱近くまで続いた。この期の詩画軸の大部分は山水画である。多数の禅僧が画面狭ましと詩を連ねている様子には一種の熱気さえ感じられる。応永につづく永享年間頃からその熱気もさめはじめてはくるが、しかしその絵画である山水画は周文様と後に呼ばれる一類型を生み出していくとともに題詩者の数をへらして絵画としての独立性を増しつつ禅林の中で定着していつている。応永期の詩画軸に描かれた山水は、それまでの襖や屏風などの室内装飾用としての山水画とは異った純粹な鑑賞用ともいべき山水画である。従って応永の詩画軸はわが国に鑑賞用山水画を導入させ定着させる役割を果たしたといえる。

一三三

島田修二郎氏はこの詩画軸流行の中で制作された山水画には二つの類型があることを指摘され、それが書斎図と詩意図であり、詩意

図は主題の上で書齋図と密接な関係をもっていることを、現存作例のみならず五山僧の詩文集にみる事例を引いて明らかにされている。<sup>(1)</sup>

書齋図は人里離れた勝景地の水辺に建つ書齋を描いたもので、その制作の主たる動因は、一般の禅僧が自分の居所や書齋に雅号をつけて、その名が示す景境を図に描かせ、時の著名な禅僧たちの題詩を求めたところにある。しかし図は現実の書齋を描いたものではなかった。応永二十年（一四一三）南禅寺で制作された溪陰小築図を例にとれば、「溪陰小築」とは南禅寺の僧子璞しほくがその住居に名づけた齋名で、図は子璞の友人が画家に描かせて六名の著名な文筆僧に詩を題してもらい子璞に贈ったものである。だがこの図に描かれた書齋をとり囲む景観は南禅寺内の景観ではないという。またこの図に著けられた六僧の詩も現実の書齋のことではなく世俗を離れた佳処にある書齋について想をめぐらせて隠者の心中を想いやるものや隠遁生活への羨望を詩句にしたもので占められている。<sup>(2)</sup> その六僧の詩の一部を左に掲げておく。

「雲山 赴ニ清賞ニ、此外更何須（大岳周崇）」

「幽隱堪レ羨、卜ニ佳處、不レ是詩人定、是禪（玉腕梵芳）」

「轟々 奇峰烟靄凝、繫ニ留、雲水ニ寄、鳥藤（履仲元礼）」

「青嶂層巒俯碧溪、何人避レ世結ニ幽栖（大愚性智）」

「老樹成レ村、護ニ寂寥、想ニ應、溪友ニ乏ニ相招（謙蔽原冲）」

「誰氏 帰休、已息レ心、茅齋僻、在ニ小溪陰（大周周裔）」

このような隠居生活へのあこがれが他の応永期の山水画を含む詩画軸には共通してみられるのである。

## 3

ところで、応永期の詩画軸に詩を寄せている人々は、五山の禅僧とは云っても限られた僧たちが中心である。かつて熊谷宣夫氏はこのことを明らかにされた論考「応永年間の詩画軸」（『美術研究』四、昭和七年）に於いて応永詩画軸の題詩とその作者の一覧表を付されたが、表（I）はその表を簡略化してそこに文献から分る二、三の例を加えてあらわしたものである。これによって見れば題詩者が特定の僧たちに集中していることは一目瞭然であろう。

すなわち限られた僧たちとは、具体的には仲方円伊、大白真玄、大周周裔、明叔玄晴、西胤俊承、謙岩原冲、大岳周崇、鄂隱慧叡、玉腕梵芳、惟忠通恕、敵中周疆、古幢周勝、惟肖得敵、叔英宗播といった人たちである。詩会の席上をはじめこれらの僧たちの私的な交友圏が舞台となつて応永期の詩画軸は制作されたのである。そしてこれらの人々は、五山禅林中の塔頭に住み、南禅寺を頂点とする五山の諸寺の住持に出世した文筆僧たちであつた。

室町初の詩画軸流行には、五山文学の発展による禅僧の文人化と共に官僚化という状況が重ね合さつていた。文筆に優れた五山の禅僧たちは、幕府や有力守護大名からは文人官僚として迎えられてい

題者(●は序)	没年	詩画軸	紫門新月図	応永十二年	応永十六年 (周及建業偈唱和)	芭蕉夜雨図	応永十七年 (悠然亭詩軸)	溪陰小築図	応永二十年	高士探梅図	応永二十年頃	八僧賞墨梅図	夕佳木図	應永二十年頃	瓢點図	應永二十年頃	三益齋図	応永二十五年以前	汪天遠意図	応永二十六年頃	侍花軒図	応永二十六年頃 (慈恩寺詩軸)	寄裡二友図	應永二十七年以前	青山白雲図	應永二十七年以前	王右軍書扇図	應永三十年以前	墨菊図	應永三十年以前	帰郷省親図	應永三十二年以前
仲方	14	伊玄			○	●	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
太真	15	周玄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
大明	19	周玄																														
謙斎	20	周玄																														
西風	21	周玄																														
大岳	22	周玄																														
岐陽	23	周玄																														
慶中	25	周玄																														
博懸	25	周玄																														
履中	25	周玄																														
玉腕	?	周玄	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
巖中	28	周玄																														
惟忠	29	周玄																														
挺用	32	周玄																														
古幢	33	周玄																														
惟肖	37	周玄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
盛与	37	周玄																														
海門	38	周玄																														
大愚	40	周玄																														
叔英	41	周玄																														
笑巖		周玄																														
その他(人知)			15	3	5	5											1	2				6	1					4		9		

(表1)

る。一方文会の世界では、隠逸生活に想いを巡らせて詩をつくり、世俗を避けて隠逸の中に身を置くことをよしと詠するという矛盾した状況があった。江天遠意図に題された盛元の詩中に「隠淪多為明時出、独喜高人能逐初(隠士はよく治った世に山から出るものだが、かれが独りよく初志を貫いているのは嬉しい)」とある。また惟肖の詩には「告帰直欲上扁舟」という句があって、官にあって隠逸を願う矛盾した状況をこの二つの詩句は反映していると云えるが、そこに矛盾した状況における悩みは読みとめることは出来ない。伝存する応永の詩画軸に著けられた詩に限ってみれば、こうした矛盾を心の葛藤として扱った詩はきわめて少ないように思われる。それは何故か。

この矛盾は溪陰小築図成立の原因となった子璞の現実の書齋についても云える。南禅寺塔頭寮舎の建ち並ぶいわば世塵の中の書齋に「溪陰小築」という隠逸の士の住いの如き名を冠して喜びとしている。またこれは子璞の書齋が例外ではなく当時の五山禅林の一般的な風潮であった。この間の矛盾をどう扱っていたのか。いいかえればそこにある考え方が応永の詩画軸の成立をささえていたのである。この考え方を代表するものとして、島田氏は溪陰小築図の大白真玄の序文をあげている。(1)次にその序文の一部を大西廣氏の現代語の訳によって引用しておこう。(2)

「……いづれを心中に会得したところがあらわれ出たのであって、物質世界に拘泥するところがまったくない。さて南禅寺の僧、純子

璞は、禅林の衆僧の群れ集まるなかに身を置きながらその書齋には『溪隠小築』と名づけている。『市に門して水を心とす』とはこうい

う人のことであろうか。これまた心中に会得したところといつてよ  
かろう。……かの竹溪六逸のかくれ住んだという徂来山も、また乱  
世を逃れて泰人たちの住みついたという桃源境も、この図の理想境  
となんの隔りもなく、むしろ両々相待つものといふべきであろう。

思うにこの図もまた、心中に会得したものを写したのであって、心  
外の景境を描いたものではない。とすればこのような絵は『心の  
画』といふべきものではないか。(下略)。すなわち大白は、禅僧  
の群れ集う世塵の中に居て、つまりそれを肯定してその塵中の書齋  
を山中の幽屋とみなす子璞の隠逸を評価し、現実とは異なるその書齋  
図を「心画」と解釈している。ここにはいかなる環境の中にあつて  
も山中にあるかの如き心境に立てるという禅的解釈がある。この禅  
的解釈に立てば、紫衣を着て隠を唱えることにうしろめたさは感じ  
ないであろう。「仕」にあつて「隠」にあこがれることの矛盾に起  
因する心の葛藤はこの解釈によれば生じないにちがいない。この考  
え方が一般的となったことは、江天遠意図に題された大岳の詩に  
窺われる。それは「近代、高人、不<sub>レ</sub>愛<sub>二</sub>山<sub>一</sub>、多<sub>ク</sub>談<sub>三</sub>大隠<sub>一</sub>、在<sub>二</sub>朝  
間<sub>一</sub>」という詩句で、大岳は「最近の高人は山に隠棲したがらず、  
大陰即ち真の隠者は環境を超越しているので朝廷の中に隠れるもの  
だと談ずる者が多い」と詩によせて伝えている。どれだけの僧が真  
にこの禅的境地に達していたかは分からないが、なかにはこの解釈

に安じ得なかつた者もいるにちがいない。その一人が玉腕ではな  
かつたろうか。

## 4

応永の詩画軸に詩を寄せている禅僧たち即ち友社の人々の中でも、  
詩画軸の序文を手がけているのは多くが地位や名望の最も高い者で  
あるから、この期においては仲方(応永二十年没)、太白(応永二  
十二年没)、大岳(応永三十年没)、玉腕(応永二十七年以降没)ら  
がその人たちであり、彼らこそ詩画軸制作の舞台における中心的な  
存在であつたといえよう。大岳は応永十一年から二十一年まで禅林  
で最も重要な鹿苑僧録の地位にあつた者で当然であろう。仲方、太  
白、玉腕のうちでは第一表をみると応永期の現存する主な詩画軸の  
すべてに題者として参加している玉腕がとくに注目される。玉腕は  
また詩を題するに当っては、たいてい筆頭とか最後とかのきわめて  
主要な個所に詩を著けている。このことから玉腕は、少くとも、  
応永十二年の柴門新月図の序文以降から同二十七年まで題者中にお  
いていいかえれば友社のうちで最も主導的な立場にあつたと推測さ  
れる。また他にこれらの禅僧群においてその団結を強めた求心的役  
割を果していたのが、応永十四年に足利四代將軍となつた義持であ  
つた。義持は南禅寺や相国寺をはじめ、各禅寺に書齋を設け頻々と  
して参詣し、しばしば友社の人々を集めて詩会を催し、石清水、伊

勢、近江永源寺等々の旅行の際にも彼らも同行させている。また義持はことさら隠逸的な禅僧をさがし求めたといわれ、このことを述べて玉村竹二氏は数僧の例をあげている。<sup>(3)</sup>例えば愚中周及。愚中ははじめ夢窓門下であったが、五山から脱れて安芸仏通寺に隠れて以来決して再び五山禅林の地を踏まなかった禅僧である。義持は応永十四年来、愚中を景仰して京に迎えようと幾度も試みたが、結局は愚中を京都に近い丹波天寧寺に居らしめることで満足せねばならなかった。これは義持の隠逸的禅僧傾倒を示す例として玉村氏があげられている数例中の一例である。義持を中心とした友社の中で、義持と玉腕は山水画導入の基調となった隠逸思想の流行に於いてとくに大きな影響を与えたのではないかと思われる。

次に玉腕の隠逸について考えてみたいが、その前に玉腕の略伝を述べておこう。なお、玉腕の伝記史料は『大日本史料』第七編十八の応永二十年三月条に一括して収められており、論考としては、熊谷宜夫「玉腕梵芳伝」(『美術研究』十五号)<sup>(4)</sup>がある。以下に述べる事蹟の根拠等は両文献に依った。また玉腕ははじめ玉桂といひ、応安三年頃玉腕に改めているが、便宜上玉腕で通した。

## 5

玉腕梵芳は貞和四年(一三四八)の生まれで、十歳の頃に天竜寺の雲居庵主春屋妙葩(一一三一〜一三八八)のもとに入った。春屋

は夢窓疎石の甥で夢窓の法を嗣ぎ、五山の主流門派である夢窓派の中心人物として活躍していた。玉腕(玉桂)は以後の十余年を京都にあって春屋に相随って過した。二十を過ぎた頃春屋と別れ鎌倉に下り、夢窓派教化振興の使命をおびて関東に下向していた春屋の法弟義堂周信に詩文を学びながら十年あまり滞在した。この間に玉腕を玉腕に改めた。玉腕三十三歳の康暦二年(一三七九)の頃、義堂の上京と前後して京に帰り、前年に南禅寺住持並びに初代僧録司となつて名実ともに五山の統轄者となつた春屋の近くに再びもどつてゐる。以後玉腕は諸山、十利、五山の住持となり五山僧としての出世コースを順調に昇つていった。諸山は周防の永興寺、十利は豊後の万寿寺、五山は京都建仁寺に出世した。

建仁寺に出世する前の応永十二年(玉腕五十八歳)七月には柴門新月図の序文を草し、すでに五山の詩僧の中心人物として迎えられていることが分る。以後足利義持を中心にした詩会の定連の主導的存在となつた。応永十七年には義持の三条坊第の亭に因む悠然亭詩軸の序文を書いている。建仁寺に出世後は春屋の塔頭である南禅寺竜華庵主となり、ついに応永二十年三月には僧階の最高位である南禅寺住持となつた。玉腕六十六歳のときであった。しかし、すぐに(三ヶ月程か)隠退し南禅寺内に創めた投老庵でその後の七年間を過している。この間に伝存する溪隱小築図、碧潭周皎頂相、三益齋図、上野家墨梅図などに讚、詩を著している。ところが応永二十七年(一四二〇)、七十三歳の玉腕は突如五山叢林を去っている。そ

の後の消息は不詳である。

江戸期の『延宝伝灯録』の玉腕伝によると、玉腕は生来隠逸を好み、出世を望まなかったが、義持は強いて南禅寺に入寺せしめたところある。玉腕の南禅寺八十一世入寺式には義持も参列し、玉腕はそれから幾ばくもなくして（三ヶ月ほどか）南禅寺住持職を退いていることから、典拠は明らかに出来ないが、あながちこれは否定できない。否、むしろ玉腕に対する義持の尊崇を推察させる事蹟として、入寺式への参列の他に、義持の三条坊門新宅内の悠然亭に題した詩序の執筆（応永十七年）や投老庵退居後の玉腕訪問がある。また瑞溪は『臥雲日件録抜尤』中に「玉腕為勝定相公所寵遇」と書き留め、玉腕自身の禅林退去の詩に「寵辱悲懼夢一場」とあるから、玉腕が義持の特別の寵遇を受けたのは事実と思われ、おそらくそれは玉腕の隠逸的な性向によるところが大きく作用したに違いない。その玉腕の隠逸は延宝伝の云うが如く「生来」のものであったかもしれないが、むしろ玉腕の人格形成期である前半生における個人的な体験のうちに深く心の底に根づいたものと考えられるのである。玉腕の隠逸思想については、彼の語録、詩文集が伝存していないので、詩画軸に残る詩や序文の他は、その前、後半生の境遇に思いを致して想像をまじえて考察をめぐらすことになる。次に玉腕の前半生の環境を、彼の隠逸との関連でふり返ってみよう。

## 6

夢窓の甥で、夢窓の法を嗣いだ春屋は傑出した政治的手腕をもっていた。玉腕が春屋のもとに入った頃、春屋は五山派の主流である夢想派の中心となって活躍していた。玉腕が相随った十余年間の春屋の活動の一端をみておく。玉腕が寺に入って間もなくの延文二年（一三五七）、春屋は將軍の命を受けて等持寺（足利氏の菩提寺）住持を引きうけ、翌年天竜寺が罹災すると天竜寺雲居庵主として直ちに天竜寺を復興した。康安元年（一三六一）には火災後の臨川寺住持となつて、この復興をすぐさま果している。貞治二年（一三六二）、春屋は官領細川頼之の帰依を受けてその創建になる光勝院の落慶式に阿波に赴き、暮には天竜寺にもどつたが、天皇の旨を奉じて伏見の大光明寺の住持にもなっている。貞治五年（一三六六）、春屋は高峰頭日（夢窓の師）の開山になる周防の永興寺を再興した。この寺にはのちに玉腕が入寺している。また同年に南禅寺改築の幹事となり諸伽藍の新築に着手している。ところが、関税と山門造営にからんで園城寺との間に問題が生じこじれた。これは旧仏教勢力最後の禅宗弾圧事件であるが、天台勢力との三年にわたる衝突紛争となり、春屋はその渦中の人となつた。

玉腕は十歳から二十二歳までの青春時代の十年余をこのような春屋妙葩の左右に相随つて過したのである。『寂室録』によれば、玉

晩十六歳の年に近江永源寺の寂室元光に参じている。玉腕は永源寺で師春屋とは生き方を異にした隠遁的禅僧に接し深い感銘を受けたものと考えられる。また、玉腕十九歳に至るまでの四年間、鉄舟徳濟が同じ天竜寺で過している。鉄舟は、生年は不詳だが、下野の人で大覚派の某師について出家し入元して、保寧寺の古林清茂に親炙して古林会下の一員となった。古林は特に高い教養と高潔な人格で慕われた。鉄舟の中国滞在は長かつたらしいが、元の至正二年（一三四二）頃帰朝してから、天竜寺に掛錫して首座となった。やがて阿波の補陀寺、播磨の瑞光寺に住し、貞治元年（一三六二）に京都五山の一つ万寿寺に入寺し、一年ほどで天竜寺竜光院を創めて隠退し、貞治五年（一三六六）に寂した。<sup>(8)</sup>中国で鉄舟の参じた古林は深い教養を秘めてつつまじやかに生きることを理想としていた。鉄舟はその家風をよく伝え、権勢から離れ、控え目で風雅隠逸に生きた高僧であった。その高潔な人徳によって、元の順宗帝より円通大師号を生前に受けている。また鉄舟は詩文に優れ、『閻浮集』が伝っている。書はことに草書に名高く、隻字片牋も得る者はこれを宝としたという。さらに鉄舟は画人として注目され、中国の文人や文人的禅僧が好んで描く蘭石をわが国ではじめて卓抜に描いている。文人画を具現したわが国最初の禅僧画家である。義堂の『空華集』に鉄舟画に題した数篇の詩が収められており、義堂は「吾は愛す鉄舟老、詩を能くし能く禅を説く、世人都て識らず、空しく墨蘭を把つて伝ふ」（「鉄舟蘭」）の如く、鉄舟の隠逸性を敬意をもって表現し

ている。玉腕の師である春屋と鉄舟とは共に夢窓法嗣の兄弟弟子であり、天竜寺二世無極の下で共に生活したことがある。その親交は鉄舟の詩文集にも春屋の語録にも窺うことができる。春屋のもとにいた玉腕が同じ天竜寺内に住む鉄舟との接触がなかったとは考えにくいのである。玉腕は早くから墨蘭を描いているが、そこには鉄舟の存在が大きく作用していて、若き玉腕は鉄舟の隠逸的禅風と高潔な人格とともに合せて感化を受けたものと思われる。少年期より政治僧春屋のもとで成長しながら、のちに書画と文筆にすぐれ高潔な人格をもち隠逸的な性向を備えて禅林で重きをなす玉腕の素地は、その人格形成期に寂室と鉄舟に出合ったことが大きく作用しているのではあるまいか。

玉腕二十三歳の応安四年（一三七一）に、南禅寺改築の幹事となっていた春屋が、天台勢力との衝突の対応をめぐる細川頼之を激怒させてしまった。そのため春屋の門徒は時の執権頼之によって僧籍を削奪され諸方に離散している。この離散に先立ち、春屋は南禅寺勝光院に潜居しているが、この頃に玉腕は鎌倉に下向して東勝寺に寄り、以後三十三歳に至るまでの十年間を鎌倉の地で送ったのである。この間に鎌倉禅林では大覚派と仏光派、いいかえれば建長寺と円覚寺の両門徒間に対立確執があつて殺伐な闘争がくり返えされてきた。<sup>(9)</sup>両者の衝突は応安元年（一三六八）から日まじに激化し、同六年まで続き、徒党を組んだ数百の建長寺門徒が円覚寺の放火を企てたり、両門徒は刀を帯して禅林を横行し、互に乱暴狼籍を働く

というありさまであった。義堂は仏光派に属したが、中立を守ってひたすら和合を説いていた。だが、応安七年（一三七四）にはついに放火で円覚寺全山は灰と化している。

一方京都では將軍の補佐役として実権を握っていた細川頼之と春屋に通じた斯波義將との政治的対立を背景にして、臨川寺の五山昇位の問題をめぐる、禅林が二つに分かれて粉糾していた。この争いは康暦元年（一三七九）まで続いた。

玉腕はこのような現実―俗僧と非宗教的環境の中で、修行と詩作にはげんでいた。しかも春屋の直弟子であるから僧籍削奪の災難は玉腕にも及んでいたはずである。<sup>(10)</sup>玉腕は官寺の社会にあつて日の当たらない年月を送っていたと思われる。詩文に沈潜する中で隠逸への憧憬は一層強まっていたことであろう。当時玉腕が多くの詩作に打ちこんでいる様子は、義堂の『空華日用工夫集』にかいまみるこゝとが出来る。絶海中津と共に五山文学の双璧と称される義堂に玉腕は詩作を学んでいたのである。その中に、「帰田」を詠じて一五六韻をつくったことがあり。<sup>(11)</sup>二十三歳の玉腕にすでに陶淵明の隠逸への関心共感と傾倒があつたことを推察させるのである。

唐暦元年（一三七九）に頼之が失脚し、新たに権力を握つた斯波義將に請われて、春屋は丹波から天竜寺に復帰し、直ちに南禅寺住持となり、さらに住持任免、位階昇進をはじめ五山官寺を統轄する最初の僧録司に任ぜられた。名実ともに禅林の実力者となつたのである。ここに至って離散していた春屋の弟子たちも五山に返り咲き

翌年には幕命により義堂も上落している。玉腕も義堂と前後して京に帰り、春屋の近くにあつてここでも詩の添削を義堂に請うている。これより玉腕は五山僧としての出世コースを順調に昇りつめていくのである。

## 7

隠逸の志を心底深く秘めながら、現実生活において玉腕の後半生を支配したのは春屋の高弟としての立場であり、不遇の中にあつても忘ることなく義堂に学んで修練した詩文の学識と才能である。さらに四代將軍足利義持との出合と思寵である。出世を厭う態度がかえつて將軍義持の意になつて強いて出世せしめられたのである。そして老いては「法中の王と称す」と賛美されるまで禅林で重じられる存在となつてしまつた。<sup>(12)</sup>『花上集』（『続群書類従』）所収に載る玉腕の詩「清泉濯足」中にみる「足を濯ひて吾れの心を洗はざるを慚づ」の句は玉腕の内省的な性格を示しているが、玉腕の感じていた洗わぬばならぬ心の汚れとは一体何だったのであろうか。玉腕の残した詩にはどれも隠逸と共に高潔な人格への強い関心が示されている。<sup>(13)</sup>また玉腕の万寿寺入寺に際して友人の惟肖が草した江湖疏の文章が伝っているが、その中で玉腕の人となり「禅と文と熟し、心と跡（筆跡）と清し」と述べており、玉腕自身高潔な人格をもつた文人僧であつたと思われる。そんな玉腕の心の汚れとは何か、私は



そこに「仕」にあつて「隠」を実現していない忸怩たる想いを読みとりたいのである。そんな玉腕の隠逸への想いを考える上で、京都個人蔵の蘭石図に題された玉腕の次の詩は注目に価しよう。

「蕙也蘭之族 同 登三風雅場<sup>（巻）</sup> 山人製 為帳<sup>（巻）</sup> 媛<sup>（巻）</sup> 雀夢應<sup>（巻）</sup> 香」

この詩は玉腕自身の隠遁生活への夢を「山人帳をつくり、猿鶴の夢まさに香るべし」と鍾山の猿鶴（隠者の棲む清浄境の象徴）によせて詠じたものであるが、この詩句は南斉の孔徳璋の『北山移文』の「恵帳空しうして夜鶴怨み、山人去つて晬猿驚く」の句をふまえている。『北山移文』は隱者文字の古典ともいべきもので、隠逸の志を変えて天子に仕えた中国六朝宋の周彦倫のような節操のない人間が北山（鍾山）に来ると山水草木が汚れるから立ち入らせないようにと移文（政府の廻状）に擬して述べたもので、朝廷の招きにたちまち変心して仕えた周彦倫に代表される偽隱者を痛烈に非難したものである。上村観光著『五山詩僧伝』所載の蘭竹図の題詩に於いても玉腕は「雀帳北山隠 幽情堪自甘」と『北山移文』の隠に触れている。わずかに残った玉腕の詩文中に一つならず二詩において『北山移文』によったものがあるのが、玉腕の隠逸志向と「仕」との内的葛藤を考察する上で私には過視できないのである。

『北山移文』をふまえることの奥に玉腕の「隠」と「仕」との心理的葛藤をみる事ができないだろうか。隠逸志向の深さにおいて、またそれと「仕」との葛藤の強さにおいて同時代の詩僧たちと玉腕

との間には大きな落差があったと思われるのである。

## 8

ところで、玉腕が墨蘭を描いたことはよく知られているが、浅野家や正木美術館の蘭蕙同芳図、鹿王院やメトロポリタン美術館の蘭石図などをはじめとして二十点近い玉腕筆の墨蘭図が伝存している。蘭は山中の岩石の片隅で、人目にふれず芳香を放つてひっそりと咲いている。この姿は隠士の象徴となる。鹿王院の蘭石図に題された玉腕の自題の中には「只一点の芳心有るに縁<sup>（巻）</sup>り、青松百尺の姿を羨まず」とある。この一点の芳心こそ玉腕の求めたところで、玉腕は山中の岩隅で幽かに咲く蘭の姿に己の隠逸の理想をたくしていたのではなからうか。つまり墨蘭は玉腕の隠逸思想の個人的表現ではなかったかと思われる。

玉腕の描いた蘭図は彼の二十六歳（応安六年―一三七三）頃にはすでにみるべき域に達していたらしく、義堂のその頃の詩に「病中に詩藁を送りて芳上人（玉腕）に還し兼ねて墨蘭を乞ふ」（『空華集』）と題した詩がある。また高橋範子氏は正木美術館の蘭蕙同芳図を玉腕鎌倉滞在中の作品と推定されている。<sup>（16）</sup>一方今村家本をはじめ応永二十年（一四一三―玉腕六十六歳）頃から押す「玉腕」印を使用した蘭石図が数点知られており、玉腕は二十歳代から晩年に至るまで生涯に亘って墨蘭を描き続けていたといえる。

玉腕がこの時代にあつてひとり蘭を描き続けたのは、玉腕に画才があつたからではあるが、もちろん生活のためでもなかつたので、そうせざるを得ない強い動因が玉腕の心のうちにあつたからだと考えざるを得ないのである。玉腕が蘭を描きつづけたのは、この解消されない内的矛盾が原動力となつていたからではないだろうか。

## 9

しかしながらついに玉腕の隠逸は現実を実現することによつてしか解決できなかったものであることを自ら証明したのである。

それが玉腕の五山叢林逐電である。このことを瑞溪周鳳は『臥雲日件録抜尤』宝徳元年閏十月四日の条に書きとどめている。これは義持の知遇に背いて隠遁する玉腕の動機を記したもので、ある時瑞溪が机下に玉腕の書を見つて、感慨をもつて書きとめて置いたものである。それによると玉腕がある日、林下に宿し金剛経を讀んでいて「若為人輕賤、(是人先世罪業、応墮惡道、以今世人輕賤故、)先世罪業、別為消滅」という箇所に至り、肝に銘じ喜びをもつて「拙者七十三歳、其の中間に於いて幾般事を経たり、今日の喜びの如きは莫し」と云つて、紫衣を脱ぎすてて黒衣をつけて、仏前に向つて、「今後は再び叢林に出頭すべからず」と誓い、「經過七十年余年事、寵辱悲懼夢一場、若得山中安樂地、看雲日々快移(牀)」の一偈を作り鹿苑僧録の蔽中周靈並びに同門諸師に呈して、近江へ去つたと

いうのである。『延宝伝灯録』の梵芳伝は、瑞溪の書き留めたこの記事を引いて玉腕の人柄を語らしめ、最後に「錫徑往江州、結菴山間、歴年而寂」と結んでいる。応永二十年玉腕六十六歳の時、「溪陰小築函」に「水面無風碧蘼蕪、山容削玉腕生室、幽屋堪羨、小佳處、不、是詩人定、是禪」の詩を題して「こんなところに住んでいるのは詩人でなければきっと禪僧であろう」と、函中に夢みた己の隠逸生活への想いを玉腕は、遅きに失した感はあるが実際に実行に移したのである。江州に赴く玉腕の脳裏には少年時代に参じた寂室元光の姿がよみがえつていたことであろう。

## 10

玉腕が五山禅林を去り、やがて義持も政治の動きに忙殺されて友社から遠ざかると、義持を中心にしたかつての友社は求心力を失つて、京都五山の詩僧たちがこぞつて詩を寄せ合ったあの応永期の熱気は失われていった。詩僧たちの中心も惟肖から次代の竺雲等蓮、江西竜派らに受け継がれると、世代も交替して一層私的な交友を核とした集りに変つていった。

応永以後は太白が示したような禅の見地からする書斎号の解釈は見られなくなり、竺雲の代では別の解釈へと変化し、儒教的立場に立つて「仕」を肯定した上で、隠逸が論じられるようになる。竹斎読書図の序文で竺雲は隠逸について次のように述べている。「隠者

には二種類ある。真の隠者と偽の隠者である。伊尹や呂尚を理想と仰ぐものは偽の隠者である。伯夷と叔斉を憧れ慕うものこそ真の隠者である。またありあまる能力をもちながら潜み隠れている隠者もいる。位人臣を極めながら身をくりましたものもあり、得意の絶頂にあつていさぎよく身を引いたものもいる。古来、聖賢の道を学ぼうとするには、修むべき八つの階程がある。格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下がそれだが、このうちの最初の五項は隠者といえども欠いてはならないものである。(下略) (大西沢)。大西廣氏はこの図の解説の中でここには「仕」の否定はなく、隠逸は、出処進退の術として把えられていると述べている。

「仕」の道の障害とならぬかぎりにおいて隠逸もまたよしとされているのである。永享五年(一四三三)制作の聴松軒図に二十五年後に追題した竺雲の詩には「靖退 由来真ニシテ 小節 松声 雖レ好莫レ耽レ閑ニ」と記し、隠遁は詮ずるところつまらぬ生き方(小節)にすぎぬとまで云っている。竹斎読書図の序文中の「有ニシテ九竜 而退ニシテ者」とは玉腕のことを念頭に置いているかのようではあるが、玉腕の隠逸はむろん竺雲とは違っていた。しかしまた玉腕の求めた隠逸の志は、同時代の太白の序文に示されたような禪的解釈で満足できるものでもなかった。玉腕自らも義持の第宅内に造られた悠然亭に因む詩軸の序文中で「古之悠然、閑中之自得、今之悠然、万機中自得之」と述べてはいるが、結局はそこに安住できないほどの深い願望であったのである。玉腕の隠逸は、時代の風潮の影響を受けて

形成されたというより、彼自身の人格形成期にあたる前半生のきわめて個人的な状況と体験の中で確固として形成されたものと私は思う。そして玉腕にとって蘭を描くことは前半生では鉄舟につながる己の隠逸のイメージと志を確認し、また後半生にあつては心底にあつた葛藤に対処するものであったのではなかったろうか。以上がなぜ玉腕ひとり蘭を描きつづけることができたのかという私の想像的考察である。

## 註

(1) 島田修二郎「室町時代の詩画軸について」(『禅林画讚』所収) 毎日新聞社 昭六十二年

(2) 以下に引用する「溪隱小築図」「江天遠意図」「聴松軒図」「竹斎読書図」等の題詩、題序の全文及び原文や訳文については、島田修二郎、入谷義高監修「禅林画讚」(毎日新聞社、昭和六十二年)の各図の解説(大西廣・横田忠司他執筆)を参照されたい。この拙論では特に「仕」と「隠」という用語をはじめ大西廣氏の解説に大きく助けられている。

(3) 玉村竹二『五山文学』(至文堂 昭三十年)一九五頁―二〇二頁 参照

(4) その他では、拙論「玉腕梵方について」(『芸術学研究』II、昭和五十一年)

(5) 「臥雲日伴録抜尤」宝徳元年閏十月四日の条  
今晨快晴、午後睡——座書棚下、見閑古紙十餘枚、就中有玉腕——

——曰、應永龍集庚子四月廿二日、早、出叢寺、借宿林下、次早、讀金剛經、至于若爲人輕賤、先世罪業、即爲消滅處、而銘肝喜甚、拙者七十歳、於其中間、經幾般事、莫如今日喜者矣、乃易服披緇、佛前發誓言

曰、不可今後再出頭叢林、苟違所誓、則於當生必做白癩、身後永墮泥犁、

遣ス

无有其期也、自書紳、以爲終身之誠也、遂作一偈、奉呈鹿苑侍儿、并同門諸公、揄然是幸眷、梵芳頓首、經過七十餘年事、寵辱悲懼夢一場、若得山中安樂地、看雲日々快移——書籍中收拾得者也、予曰、然則玉

(16) 高橋範子「正木美術館藏玉腕梵芳筆蘭蕙同芳図について」(「鎌倉」60・61合併号、平成元年)

腕呈殿中——定——乎、玉腕爲勝定相公所寵遇、然——違鈞

旨——赴江時、所誓者也、今見之、不旨无惑、泉以供後人觀覽耳、

(6) 春屋の事蹟は、『智覚普明国師語録』(大正新修大藏經第八十卷所収)、玉村竹二『五山禅僧傳記集成』(講談社 昭和五十八年)

(7) 『永源寂室和尚語録』(大正新修大藏經第八十一卷所収) 下之二 円応禅師行状、参照

(8) 鉄舟伝は、玉村竹二『五山禅僧傳記集成』参照

(9) 玉村竹二・井上禅定撰『円覚寺史』(円覚寺 昭三十九年) に詳しい。

(10) 『空華日用工夫略集』 応安三年八月十三日条で、玉腕のことを義堂は禅林の官職名でなく芳上人と呼んでいるが、このことと関係があるう。

(11) 『空華日用工夫略集』 応安三年八月十三日条、参照

(12) ○清泉濯足

世路紅塵十丈深、往來爲客恨難禁、自剝岩下漣漪碧、濯足慚吾不洗心、

(13) 例えば、○鹿王院藏蘭石函詩

百晦養花今已滋、雨餘淺碧掠愁眉、只緣一点芳心在、不羨青松百尺姿

○安田家藏蘭竹函詩

造化小兒如忤人、故教荆棘與蘭隣、湘波日々穉風起、一片孤忠憶楚臣

(14) 惟肖得巖『東海瓊華』所収「芳玉腕住蔣山江湖疏」

(15) 『本光国師日記』二十九 元和七年三月二日条

一雀帳北山隱、幽情堪自甘、聊將蕙花露、擬洗彼休慚 玉腕□(印)

岩ニカキツハタ・竹ノ賛

右之墨跡、土井大炊殿内井出藏人所より見せに來、數寄ニハ出問數由申